様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 24 年 3 月 7 日現在

機関番号：１６３０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：２００８年度～２０１０年度
研究課題番号：２０５２０１６５

研究課題名（和文）朝鮮戦争をめぐる文学と 1950 年代の社会表象の総合的研究

研究課題名（英文）Research on the Literature and Societal Representation during the Korean War in 1950s

研究代表者　中根　隆行（NAKANE TAKAYUKI）
愛媛大学・法文学部・准教授
研究者番号　８０４０３７９９

研究成果の概要（和文）：
本研究は、1950 年に勃発した朝鮮戦争にかんして、どのような文学的表現が行われたのかを検証した研究である。朝鮮戦争は日本の戦後復興をもたらした戦争であると同時に、東アジアの冷戦体制を決定づけた戦争である。しかし、朝鮮戦争にかかわる文学的表現は、より複雑な様相を呈して描かれていた。たとえば、朝鮮戦争をテーマにしながら、それを同時代の日本社会への批判や知識人の苦悩として描いた堀田善衛『広場の孤独』の事例があった。また、広島や福岡、愛媛の地方紙誌においては、この時期に朝鮮戦争をテーマにした詩歌が多く発表され、それらがアメリカによる日本の軍事基地化への批判等とともに、旧植民地での経験や引揚げ体験をめぐる記憶と結びつくという特徴が見られたのである。

研究成果の概要（英文）：
This thesis tries to look into literary expressions about the Korean War erupted in 1950. The Korean War brought postwar reconstruction to Japan and at the same time the War dominated the situation of the cold war in East Asia. However literary expressions concerning the War were depicted in more complicated aspects. “Solitude in the Plaza” by Yoshie Hotta might be a good example for stating this. And during that period in Hiroshima, Fukuoka and Ehime prefectures, local newspapers carried lots of poems on the theme of the Korean War and this made people create criticism against military bases development in Japan also evoke experience and memories in the former colony.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成２０年度	1,100,000 円	330,000 円	1,430,000 円
平成２１年度	1,000,000 円	300,000 円	1,300,000 円
平成２２年度	800,000 円	240,000 円	1,040,000 円
年度			
年度			
総　計	2,900,000 円	870,000 円	3,770,000 円

研究分野：日本近現代文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：朝鮮戦争、社会表象

１．研究開始当初の背景

朝鮮戦争（1950-53）は、韓国では“韓国戦争（6.25 事変）”、朝鮮民主主義人民共和国（以下「北朝鮮」と記す）では“祖国解放戦争”と呼ばれている。この戦争は、朝鮮半島の南北分断を決定づけるとともに、東北アジアの冷戦体制を確立させた戦争であるが、アメリカでは“忘れられた戦争”（ブルース・カミングス）として語られている。アメリカ軍の兵站基地という役割を担い、朝鮮特需によって経済的再建の礎を築いた日本にとっても、ナショナルな歴史においては国際社会への復帰と戦後復興を中心に記述されている。この意味では、旧植民地であった朝鮮半島の内戦はいわば対岸の火事として語られる“忘れられた戦争”だといえる。

だが、この「戦後史の転機としての朝鮮戦争」（本多秋五）は、個々具体的な文学の諸相においては、小田実『明後日の手記』（1951）や堀田善衛『広場の孤独』（1952）のように、アイデンティティの揺らぎやその衝撃性が書きとめられている。朝鮮戦争とは何かという切実な問いはまた、許南麒『火縄銃のうた』（1952）や張赫宙『嗚呼朝鮮』（1952）、金達寿『故国の人』（1956）などの在日コリアン文学を産み、そして松本清張『北の詩人』（1964）や井上光晴『他国の死』（1968）などのちに発表される諸作においてもさまざまな着眼点から追究されている。

研究開始当初は、朝鮮戦争と文学に関する研究には、渡邊一民『〈他者〉としての朝鮮――文学的考察』（岩波書店、2003）、丸川哲史『冷戦文化論――忘れられた曖昧な戦争の現在性』（双風舎、2005）、黒古一夫『戦争は文学にどう描かれてきたか』（八朔社、2005）があり、また井上ひさし・小森陽一編『座談会昭和文学史』第 6 巻（集英社、2004）には示唆に富む指摘も多々ある。論文には趙正民「金達寿「孫令監」試論――「朝鮮戦争」と「六・二五」のあいだ」『叙説Ⅱ』（2002.1）や伊豆利彦「朝鮮戦争と日本文学――「記念碑」「玄海灘」「風媒花」」（『社会文学』2002.8）、佐藤泉「絶望の表現としての暴力、という問題――松本清張「黒地の絵」」（『日本文学』2005.1）などがある。これらの朝鮮戦争と文学に関する研究動向の特徴としては、(1)近年優れた成果があげられつつあるものの、(2)朝鮮戦争を描いた文学の個別研究に限定される傾向にあり、1950 年代の社会表象といった同時代考証的な位置づけが不十分である。以上の点から、(3)関連研究の成果はいまだ部分的であり、総合的な研究が望まれる状況にある。

２．研究の目的

本研究の目的は、日本の戦後復興をもたらす起爆剤となった朝鮮戦争にかんして、文学がいかに描いてきたのか、またいかに描かれてこなかったのかという点に着目し、この“忘れられた戦争”の文学的記憶を 1950 年代の社会表象として層的に検証することにある。層的把握を旨とするのは、戦後復興を遂げる日本の 1950 年代的心性を裏面で支えていたのが朝鮮戦争とその記憶だと考えるからである。本研究は、朝鮮戦争と文学の問題を、まず東北アジアの冷戦体制という観点から位置づけることによってナショナルな歴史からみた朝鮮戦争のイメージを相対化し、この時期に生成された思潮的雰囲気や旧植民地への眼差し、アメリカによる日本の軍事基地化を通じた対米意識の変容や在日コリアン文学の動向などを含めて総合的に究明することにある。

本研究は、近年まで比較的研究が少なく、

考察対象となる文学作品が個々の事例や特定のものに限定される傾向にあった朝鮮戦争と文学の関係性を総合的に捉えようとすること、そのために本研究に関連する文学作品や朝鮮戦争に関する言説を網羅的に収集し、同時代の社会表象の構造のなかで位置づけることを鑑みている。以上をとおして、本研究は、日本における“忘れられた戦争”としての朝鮮戦争とその文学的記憶が、戦後復興を遂げつつあった日本の 1950 年代的心性を裏面においていかに支えていたのかを資料を通じて実証的に明らかにすることにある。これによってアジア的視座からみた 1950 年代の文学領域における新たな展開の可能性を探るとともに、朝鮮戦争期を契機として構築された戦後日本のアイデンティティ形成の深層を具体的に検証するという点でも意義がある。

３．研究の方法

本研究の実施については、(1)朝鮮戦争関係資料の調査および収集、(2)国内外における朝鮮戦争研究関連文献の踏査と収集、(3)朝鮮戦争期における新聞・雑誌関係記事の横断的調査、(4)各細目テーマに基づく人物・グループの動向把握、(5)関係資料の検証と分析、という 5 項目に分けて構成している。研究方法としては、先行研究の動向を把握した上で国内外での資料調査を継続的に実施し、各年度の 9 月と 3 月に収集資料の整理・書誌作成を行った。なお、国外調査は各年度 1～2 回実施するものとし、おもに本研究の基盤となる同時代資料の発掘および関連文献の収集にあてた。対象となる文学作品については随時分析するというかたちをとった。また 2009 年度と 2010 年度は、資料調査にかんしては追跡調査を適宜実施し、研究成果の発表や学術論文・報告書の執筆に力を注いだ。

４．研究成果

(1)2008 年度は、朝鮮戦争期の文学および社会表象にかんする基盤的資料の調査・分析を行った。①国内における朝鮮戦争関連資料の調査・収集では、総合雑誌・文芸雑誌を中心に朝鮮戦争報道を調査し、メディア別の報道の特徴やその偏りを分析した。また、文学作品については初出・初版本を中心に調査し、書評など関連資料とともに同時代資料の整理に努めた。この時期は GHQ 占領下の影響ということもあり、朝鮮戦争の表象は敗戦後の崩壊した都市像と特需による経済復興の断片的な記述が特徴となる。②韓国での海外資料調査では、国会図書館・国立中央図書館・戦争記念館などを中心に実地調査を行った。特に朝鮮戦争休戦後における朝鮮戦争の位置づけにかんする資料を多く収集でき、整理・分析を開始している。③2008 年度の成果としては、①にかんする作品論として「堀田善衛『孤独の広場』の射程-朝鮮戦争と同時代文学」（日本文学研究会十一届年会及学術研究会、2008.8.19、中華人民共和国・大連市大連外国語学院）と題する口頭発表を行った。これについては 2009 年度中に学術論文としてまとめる予定である。これらの成果を踏まえ、④1950 年前後の国民文学論争や平和問題談話会の活動、在日コリアン文学の動向や北九州地域の地方史など朝鮮戦争の影響が強いと思われる重要な細目テーマについても資料調査・分析を進めている。

(2)2009 年度における研究内容とその成果は次のとおりである。まず 2008 年度の成果をもとに朝鮮戦争関連資料の調査および収集を実施した。また国内外における朝鮮戦争研究関連文献の調査収集にかんしても、特に国内・韓国の文献を中心に継続して実施した。

韓国文献については、2008 年度の朝鮮戦争研究関連文献から得た情報の追跡調査を韓国にて実施し、特に韓国文学研究における朝鮮戦争関連文献を中心に調査した。この研究成果については重要性の高いものも含まれており、書誌としてまとめるだけではなく、今後、別途学術論文として公表する予定である。

次に 2009 年度の研究成果としては、これまでの調査結果をもとにして学術論文「堀田善衛『広場の孤独』の射程―朝鮮戦争と同時代の日本文学」を執筆し『韓国語と文化』第 7 輯に掲載した。これは 2008 年度に中国日本文学研究会十一届年会及学術研究会(8 月 19 日)で行った口頭発表をもとに追加調査を経て活字化したものである。1950 年に勃発した朝鮮戦争が GHQ/SCAP 占領下の日本の文学界にどのように認識されていたのかを堀田善衛『広場の孤独』(1951)を中心に論じたものである。また「原爆の記憶と朝鮮戦争―1950 年広島における反戦平和詩のダイアグラム」と題した口頭発表を第 30 回原爆文学研究会(3 月 21 日)にて行った。この発表は 1950 年の『われらの詩』や『反戦詩歌集』を中心に朝鮮戦争の勃発が広島の原爆詩にどのような変容をもたらすのかを論じたものである。

(3)2010 年度は引き続き、朝鮮戦争期の文学および社会表象にかんする基盤的資料の調査・分析を継続的に実施した。これまでの研究の総括および新たな研究課題への接続を意識しながら、朝鮮戦争関連資料の調査・収集を続けるとともに、文学作品については朝鮮戦争下の社会的文脈との関連から分析を行った。朝鮮戦争の表象は敗戦後の崩壊した都市像と特需による経済復興の断片的な記述が特徴となるが、たとえばそれは広島や長崎では敗戦・反戦思想やそのイデオロギー的特徴も顕著に表れており、アジア太平洋戦争の記憶を想起する言説と地続きであった。こうした地域的な特徴は、1950 年前後の国民文学論争や平和問題談話会の活動と連関するものの、このような地方紙誌での広がりは独自なものとして捉えられる。そこで特に、広島を中心とする地方紙・文学サークルの調査を詳細に行った。それらのなかで新たな知見も得られた。朝鮮戦争の勃発が契機となるのことで、在朝鮮・旧満洲日本人を中心にして植民地時代や外地引揚げ経験関連の語り直しが活発に行われていること、また地域的に限定せざるをえないものの、広島地域における原爆文学関連誌において朝鮮戦争と 1945 年 8 月の原爆の記憶が重ねられていること、そして朝鮮戦争期の文学的表現は、上記の広島の場合も含み、現代詩のみならず短歌や俳句等の詩歌としてはかなりの規模でなされていることである。以上の知見については、再度詳細な調査が必要ということもあり、現在、継続して調査・分析を実施している状況である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

(1)中根隆行、「堀田善衛『広場の孤独』の射程―朝鮮戦争と同時代の日本文学」、『韓国語と文化』、査読無、韓国語文化研究所、第 7 輯、2010 年、pp. 187-210

〔学会発表〕（計 2 件）

(1)中根隆行、「原爆の記憶と朝鮮戦争―1950 年広島における反戦平和詩のダイアグラム」、第 30 回原爆文学研究会、2010 年 3 月 21 日、九州大学西新プラザ(福岡市)

(2)中根隆行、「堀田善衛『孤独の広場』の射程―朝鮮戦争と同時代文学」、中国日本文学研究会十一届年会及学術研究会、2008 年 8 月 19 日、中華人民共和国・大連市大連外国語学院

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
中根　隆行（NAKANE TAKAYUKI）
愛媛大学・法文学部・准教授
研究者番号：80403799

(2)研究分担者

(3)連携研究者